

〈歴史研究の過去・現在・未来——『史林』第一〇〇巻刊行によせて〉

『史林』と京大東洋史学

礪波 護

はじめに

史学研究会の機関誌『史林』が、一九二六（大正五）年一月に第一巻第一号を創刊してから、第一〇〇巻を数えることになった。この機会に、史学研究会の創立以来の略史を、京都大学文学部の東洋史学教室との関わりに重点をおいて、述べることにしたい。

一 京都文科大学の創設と史学研究会の創立

京都大学文学部の前身である京都帝国大学文科大学が創設されたのは、当初より計画のあった四分科大学、すなわち理工科大学・医科大学・法科大学・文科大学のなかでは最も遅く、一九〇六（明治三九）年六月であった。同年にまず哲学科が置かれて九

月に授業が開始され、翌一九〇七（明治四〇）年に史学科が設置されて九月に授業が開始された。入学生は本科十一名・選科生二名であった。その翌年に文学科が設置される。

文科大学の創設時の情況については、一九三五年十一月刊の『京都帝国大学文学部三十年史』と、一九五六年十一月刊の『京都大学文学部五十年史』に詳しいので、両書などを参考にし述べる。

史学科の第一回学生として入学した西田直二郎の「史学科創設のころの歴史学を思う」（『京都大学文学部五十年史』所収）によると、史学科設置の前に欧州から帰朝し、史学科開講に先立って教授となった内田銀蔵が、史学科なるものの組織・編制に参画し、史学科の主任教授として、国史概説と史学研究法を講じた。史学

研究法に関しては、東京帝大文科の坪井九馬三の著作が出されたばかりであったが、その内容はドイツのベルンハイムの著作に依るところの多いものであった。内田はベルンハイムの歴史学方法論に疑問をもち、独自の理論を講じた、と言う。

内田が史学理論に留意したことは、まもなく創刊される『藝文』の第一年第一号以下に四回にわたり掲載された「史学と哲学」と題する論文が物語っている。それは両者の学問としての性質上の関係を取り上げ、史学と哲学が相依り相助くべきを説いたものである。内田は、この外にも「歴史の理論と歴史の哲学」を『史学雑誌』に五回連載し、「史学地理学と他の諸学科との聯絡關係に就きて」と題する講演を、中等学校地理歴史教員協議会で行った。これらの論考は、一九一九年に現職のまま病死した後、「史学理論」として纏められ、同文館から刊行され、〈内田銀蔵遺稿全集〉第四輯として再刊されている。

およそ学会の組織は、学問研究の進展とともにあり、そこで行われる会員相互の切磋が、教室における研鑽と相俟って、学生生活の最も重要な部門となるものであり、文科大学の創立当初の教育方針の中にも、各教科毎に一定の組織ある学会をもつべきである、と期待された。まず哲学科開講の翌一九〇七（明治四〇）年二月に教育学会が組織されたが、哲学科全体の京都哲学会は、一

九一四年十一月に創立され、『哲学研究』（一九一六年）が発刊される。当初は弘文堂から発行され、現在は創文社から発行されているが、創文社が出版事業を止めるとの報道がある。

史学科の学会である史学研究会は、史学科開講の翌一九〇八年二月十一日に文科大学第八番教室における例会講演会、および学内の尊攘堂における史料参考品の展覧を開いたのに始まる。翌三月十二日に醍醐三宝院・日野法界寺・宇治平等院を見学、専門家の実地研究を聴くという特色ある発足をした。当初の会員数は六十余名、隔月一回の例会と年一回の総会を会規とした。会の運営方針は、東京の史学会の運営を参考にしつつ、内田銀蔵を中心に定められ、最初の評議員は、内藤虎次郎・中山再次郎・内田・三浦周行・坂口昂の五名であった。

当初の史学研究会の三本柱は、講演会と史料参考品の展覧、それに専門家の臨地研究を聴く、であった。最後の近隣の寺社を参観して、専門家の実地研究を聴くという企画は、私が学生院生であった一九六〇年代も続けられ、赤松俊秀や藤岡謙二郎などが講師を務めていた。しかし大学紛争の時期に中止となり、現在にいたっている。

およそ学会の成果発表の形は、大きく二つに分かれる。一つは、口頭発表そのものを重視し、講演録の形で発表するもの、もう一

つは、口頭発表したものに、典拠などを注記して論文の形で発表するものである。史学研究会の場合、当初の八年間は前者の形を採用したのであった。すなわち『史学研究会講演集』の第一冊から第四冊を一九〇八年から一二年にかけて出版し、それにつづけて『史的研究』を一九一四年に、『統史的研究所』を一九一六年に刊行したのである。『史林』前史の時代である。『史林』の創刊号、すなわち第一巻第一号が世に問われたのは、一九一六（大正五）年一月のことで、季刊誌として毎年各巻四冊が第二次世界大戦中の一九四三（昭和十八）年まで順調に発行され続けたのである。

文科大学の代表的な学会である京都文学会が組織されたのは、一九一〇（明治四三）年二月で、教授全員が評議員となり、哲学科の桑木巖翼、史学科東洋史の桑原隲蔵、文学科の上田敏が編纂主任、小川琢治が会計主任となり、四月に機関誌『藝文』が発行された。藝文の二字は、中国の史書『漢書』の藝文志から命名されたので、「げいぶん」とは読まず、「げいもん」と読む。ただ一九一六年に『哲学研究』と『史林』が創刊されたため、『藝文』の執筆者の多くは文学科の関係者が占めるようになる。一九一九年に組織替えがあつて、美学の植田寿蔵、東洋史の那波利貞ら三名が編纂委員となり、やがて那波一人が編纂委員となり、新村出の監督のもとに続けられたが、一九三一年に終刊となり、京都文

学会は自然消滅する。

史学研究会と京都文学会のほかに、東洋史教室と関連の深い学会として、支那学会があり、一九〇七（明治四〇）年十月に創立された。支那哲学史・東洋史・支那語学支那文学の三学科の教官・学生および学外同好の士を会員とし、広く東洋学の研究を目的とする。ただし何らの規約を設けず、同好者の全く自由な会合となっていたことに、この会の特色があつた。毎月一回例会を開き、一九一四年ごろから、毎年一回公開講演会を開き、第一回は近衛公爵家蔵の大唐六典の版本などが展観された。支那学会は機関誌をもたなかったが、ほぼ同じ会員からなる支那学社が創立され、雑誌『支那学』が一九二〇年に発行されたので、支那学会での講演や研究発表の多くが同誌に掲載され、広く愛読された。

このように学会としての史学研究会は一九〇八年に発足し、京都文学会は一九一〇年に組織されたのであるが、機関誌の発行に關しては、『史林』の創刊は一九一六年で、『藝文』の創刊が一九一〇年であるのに比べて、遅かつたのである。この機会に、創設期の東洋史講座の二人の教授、内藤虎次郎（号は湖南。一八六六一—一九三四）と桑原隲蔵（号は北洲。一八七一一—一九三二）が、『藝文』と『史林』『支那学』に掲載した論考について触れておこう。

内藤は、『藝文』の第一巻に、邪馬台国論争の嚆矢となった「卑弥呼考」を三回に亘って連載したのを切っ掛けに、第二巻に「新羅真興王巡境碑考」「倭面土国」、第三巻に「清朝姓氏考」「清朝開国期の史料」、第四巻に「蒙古開国の伝説」、そして第十五巻には「焼失せる蒙滿文蔵経」といった、後に論文集『読史叢録』（弘文堂、一九二九年）に収録される論考を寄稿した。『読史叢録』の巻頭に配された「卑弥呼考」とつぎの「倭面土国」には、詳しい附記が付けられている。日本史家の佐伯有清の没後に上梓された、遺稿『邪馬台国論争』（岩波新書、二〇〇六年）は、内藤湖南の「卑弥呼考」に焦点を合わせた論争百年史であるが、この附記にしばしば言及している。本書で始めて知ったのは、内藤の「卑弥呼考」が、久米邦武の「神道は祭天の古俗」と同様に、神道家から伊勢神宮に対する不敬とみなされたことと、東京の黒板勝美と末松保和が白鳥庫吉の邪馬台国九州説に左袒せず、内藤説に共鳴したらしいことであった。

内藤は、『史林』には創刊号に「礼部志稿解題」、第二巻に「憲台通紀考証」、第五巻に「都爾鼻考」、第七巻に「清朝初期の継嗣問題」、第十九巻に「支那歴史的思想の起源」などの論文を掲載した。しかし『支那学』が創刊されると、執筆の重心は「支那学」に移し、第一巻に「章実齋先生年譜」「富岡氏蔵唐鈔王勃集

残卷」「尚書編次考」「營造方式の新印本」「盛伯義祭酒」、第二巻に「爾雅の新研究」「旧鈔本翰苑に就きて」「胡適之の新著章実齋年譜」「盛伯義遺事」、第三巻に「正倉院尊蔵二旧鈔本に就きて」「易疑」といった、後に論集『研幾小録——名支那学叢考』に収録される論考を寄稿した。その後も、第六巻に「昭和六年一月廿六日御講書始漢書進講案」「擬策一道」を発表したのである。

桑原は『藝文』の創刊号に「西安府の大秦景教流行中国碑」を発表し、その第一巻に「清国の京師大学堂」「熱河の離宮」「老子化胡経」、第二巻に「觀耕台」「紙の歴史」、第三巻に「創建清真寺碑」、第四巻に「支那人辮髮の歴史」、第五巻に「晋室の南渡と南方の開発」、第六巻に「大宛国の貴山城に就いて」を寄稿した。同時期に史学研究会の『統史的研究』に「張騫の遠征」を発表し、『史林』が発刊されるや創刊号に「那珂通世遺書」を読むを書き、第一巻に「波斯湾の東洋貿易港に就て」、第四巻に「カンフウ問題殊にその陥落年代に就いて」、第九巻に「陳垣氏の『西域人華化考』を読む」、第十二巻に「長安の青竜寺の遺址に就いて」などを寄稿したが、『支那学』には、第二巻に「梁啓超氏の『中国歴史研究法』を読む」を載せただけで、内藤とは見事な対照をみせているのである。

二 史学の三教室における学会の創設

京都帝大文科の創立を機縁として創設された学会の中で、史学研究会と京都文学会は、機関誌として『史林』と『藝文』を発行したが、支那学会は機関誌をもたず、雑誌『支那学』はほぼ同じ会員からなる支那学社が刊行したことを特記したが、支那学会に限らず、機関誌をもたない学会は多かったのである。『史林』の表紙には今も〈史学・地理学・考古学〉と明記されているが、〈史学〉の分野における国史学・東洋史学・西洋史学のいずれも、学会は組織されたが、独自の機関誌はもたなかった。なお地理学教室については、同教室編『地理学 京都の百年』（ナカニシヤ出版、二〇〇八年）が詳しい。私も「宮崎市定の「地理学教室主任」兼担」と「森鹿三と人文科学研究所」の二篇を寄稿し、礪波護「敦煌から奈良・京都へ」（法藏館、二〇一六年）の「第V部 京都の中国学」に再録した。

まず国史学教室の場合、一九一〇（明治四三）年夏に第一回卒業生を出したが、同年十二月に学生有志が三浦周行教授指導のもとに史料講読を目的とする「読史会」を創めた。以来卒業生の増加に伴い、その研究発表機関となり、毎年秋季には大会を行い、公開講演会をも開き、また臨地見学旅行を試みて知見を広めるな

ど、学会としての活動を顕著に示すようになっていたが、機関誌はなかった。

読史会はその後も順調な活動をつづけ、一九三〇（昭和五）年十一月にはその創立二十周年を迎え、『読史会二十周年史』を編纂した。巻頭に記念の集合写真を三点のみ掲げ、最初に三浦周行の筆になる〈小史〉を、その他は藤直幹と柴田実の両名が執筆した。会合及び旅行については、発会から例会、大会のすべてに互つて、会場から発表者までを網羅している。巻末に会員による感想文を収める。大会会場は、第四回までは文学部第九教室だったが、一九一四（大正三）年の第五回からは学生集会所で行われた。この集会所は、オックスフォードやケンブリッジの学生クラブを模して、紳士教育のために建てられたものであった。大正末年に楽友会館が竣工すると、一九二五（大正十四）年の第十六回からは、会場も楽友会館に移ることになる。

読史会は、その創立五十周年を迎えた一九六〇（昭和三五）年十一月には、『回顧五十年』を、また一九九〇（平成二）年十一月には『読史会八十年』を刊行している。前者の『回顧五十年』には、まず「回顧五十年」が冠せられ、創立から大正期・昭本期・戦後の四節に分けられた簡潔な略史が述べられ、ついで「年代記」の後、十六名による興味津津な「回想」が綴られている。

後者の『読史会八十年』には序文「読史会八十年の顔」につづき、各年度の鮮明な集合写真と、名前と肖像の同定がなされていて、参考資料としての、研究室関係職員一覧と読史会大会発表題目とにも有益である。

つぎに西洋史研究室の場合、「読史会」と同じく、一九一〇（明治四三）年夏に卒業した第一回卒業生の首唱により、同年十月に創められ、原勝郎教授の唱導により、外国雑誌を読むことを主眼として「西洋史読書会」と名付けられたが、のちには外国図書で紹介と研究発表が加えられた。途中、第一次世界大戦の勃発期に中断したこともあったが、大戦終結後、復興第一回が一九一九（大正八）年十月に開催された。会場は最初、原則として教室や研究室ではなく、学生集会所であり、大正末年に楽友会館が竣工すると、会場もそちらに移るのは、「読史会」と同じである。機関誌をもたなかった点も「読史会」と同じである。一九八二年十一月に京都大学文学部西洋史研究室から刊行された『読書大会 五十年の歩み』は、前編「西洋史読書会の歴史」と後編「読書会と卒業生」の二編からなるが、これは『読書会五十年の歩み』ではなく、あくまでも読書会大会の五十年の歩み、なので、注意を要する。

国史教室と西洋史教室が、それぞれ明治の末年、第一回卒業生

によって「読史会」と『西洋史読書会』を組織されたのに対し、東洋史教室の場合は大正年代まで独自の学会組織はなかった。おそらく哲史文に跨がる支那学会が活動し、支那学社の『支那学』が刊行されていたため、必要性を感じなかったであろう。ところが、一九二六（大正十五）年八月に内藤虎次郎が停年退官する時期に、東洋史学のみの一学会を設立する必要性を痛感させ、翌昭和二年十月、卒業生・学生の要請で「東洋史談話会」が発足し、主任教授の主宰のもとに毎月例会を開くことになった。一九一九年以降、高等学校が従来の一高から八高までの所謂ナンバースクール以外に、地名を以てする新制高校が新設された影響により、明治末・大正期には毎年二名前後であった卒業生が、昭和期に入つて十数名に増え、大学院在学者はつねに二十数名もいたのである。

東洋史教室の卒業生にとって幸いなことに、一九二九年四月に東方文化学院が東京と京都に開設され、京都は若手の研究者を優遇して、多数の研究者と助手を採用した。東洋史研究室の教授陣は、一九二六年の内藤湖南につづき、一九三〇（昭和五）年に桑原隲蔵、一九三二年に矢野仁一が停年を迎えた上に、一九三一年に桑原が、一九三四年に内藤が相次いで逝去したので、教室運営は羽田亨教授と那波利貞と宮崎市定の両助教教授だけになった。し

かも羽田は一九三二年に文学部長になるなど、多忙を極めることになる。このような時期に、東方文化学院の연구원と助手や卒業生の間で、口頭発表だけでは飽き足らず、独自の機関誌をもつことが模索された。かくて羽田を会長に戴く「東洋史研究会」を発足させ、一九三五年十月に隔月刊『東洋史研究』の創刊号を出した。時に同人の数は三〇名で、編集代表者は一九三三年卒業の今西春秋と内藤戊申であった。

但し、那波と宮崎は蚊帳の外であった。那波が『東洋史研究』に寄稿するのは第四卷第六号掲載の一篇だけであったが、宮崎は第二卷第三号の余白録に「バグダット旅信」、フランス留学から帰国後に第四卷第六号に「東洋史上に於ける孔子の位置」を寄稿して以降、毎巻に論考を発表しつづける。「東洋史談話会」もいよいよ盛んとなり、一九三六（昭和十一）年十一月以降、毎年一回大会を開催するようになるのである。

史学の三教室の学会の内、国史学の「読史会」と西洋史学の「西洋史読書会」は五十年史のような回顧の書を出版したのに対し、東洋史学の学会、「東洋史談話会」も「東洋史研究会」もこうした本を出版しなかった。しかし、その代わりに、『東洋史研究』の「総目録」が、第一巻―第二十五卷（一九六七年七月）と第一巻―第五十卷（一九九二年九月）の二度編集刊行され、それ

ぞれの序文を会長の宮崎市定が書き、「東洋史談話会」と「東洋史研究会」の創立の事情を述べているのが参考になる。しかも、一九八二年七月に同朋舎より、『東洋史研究』全二十巻の復刻版が出版された時も、宮崎が序を書き、その冒頭に、

関以西に本拠をおく学会専門誌の変遷の大勢を鳥瞰してみようか。先ず明治の末に『藝文』出でて大いに栄え、大正に入つて、『藝文』衰えて、『支那学』興り、昭和に入ると、『支那学』競わずして『東洋史研究』現われ、隆運を続けて今日に至っている。もちろんこれは我々の専門の狭い節穴から覗いた管見に過ぎぬこと、言うまでもない。

とあり、大勢三転を見事に示している。これら宮崎の三篇の序は、いずれも『宮崎市定全集』24 随筆（下）（岩波書店、一九九四年）に収録されている。

学会の歴史を振り返る企画がなく、代わりに機関誌の総目録を刊行してきた点では、史学研究会とその機関誌『史林』の場合も同じであった。まず『史林総目索引 第1巻―第20巻』が一九三五年十一月に編まれ、巻末に「史学研究会会員名簿」が付録されている。なお単行の会員名簿として、二〇〇六年版が出されている。ついで『史林総目録 第1巻 第40巻』が一九五八年七月に出された。はしがきは理事長の宮崎市定が書いたが、『宮崎

市定全集』に漏れてしまっている。この総目録には、『史林』掲載分については、Ⅰ研究論文・Ⅱ書評と紹介・Ⅲ彙報・Ⅳ口絵に大別したに止まらず、研究論文の最後に、『史林』の前身である『史学研究会講演集』の第一冊から第四冊、『史的研究』と『統史的研究』の目録をも載せているので、便利である。二十年後、第三回目の『史林総目録 第一巻―第60巻』は一九七七年十二月に出版され、刊行の辞は理事長であった東洋史の佐藤長によって認められた。その後は出版されていない。

更めて言うまでもなく、史学研究会に先立つ史学の学会は、東京の帝国大学文科大学史学科の史学会であり、一八八九（明治二二）年十一月に創立された。五十周年に当たる一九三九（昭和十二）年五月に『史学会小史 創立五十年記念』が、創立百年に当たる一九八九（平成元）年十一月に『史学会百年小史』が上梓された。一九一八（大正七）年に、史学研究会は史学会との間で、大会の講師交換を行うこととなり、まず内藤虎次郎が史学研究会を代表して史学会の第二十回大会で「拉薩の唐蕃会盟碑に就いて」と題する講演をし、史学会から坪井九馬三が「毛皮国本の国家」の題で講演した。これ以降、毎年講師交換がつついたが、京大東洋史からの講師は、二二年に矢野仁一が「支那の開国」、二二年に羽田亨が「中央亜細亜の探検」、二七年に矢野仁一が「義

和拳匪乱の真相につきて」、三〇年に羽田亨が「大月氏及び貴霜について」、三四年に那波利貞が「唐代の敦煌地方に於ける朝鮮人の流寓につきて」の題で講演した。

一九三九年の史学会創立五十年記念第四回大会には、宮崎市定が「羨不足論」と題する講演をし、上野の精養軒で開かれた晩餐会を兼ねた総会では、祝詞を述べ、乾杯の発声を行い、宴はてて散会の際に奏でられたのは、宮崎が西アジアで買求めたアラビア音楽とエジプト国歌のレコードであった。四一年には田村実造が「明と蒙古との関係についての一面観―特に馬市を中心として―」を、四二年に那波利貞が「敦煌発見の唐水部式に就いて」を講演した。四三年に西洋史学の原随園が「ギリシャ史学の展開」と題して講演したが、戦況の激化により二年間は史学会大会は開かれず、敗戦後の四六年に考古学の梅原末治による講演「支那古文化の東方波及に関する考古学上の所見」を最後に講師交換は終了したのである。

三 敗戦と世界史研究会の創立と瓦解

文系の学部、とりわけ文学部にとって図書の充実、研究あるいは教育に直接影響する重要な事柄である。京都大学文学部は開設当初から、図書は各研究室に備えつけ、附属図書館に集中させ

ずに、学部図書室ないしは研究室に分散配置する方針が確立してきた。一九一四（大正三）年に史学科陳列館が完工し、史学科の各研究室と美学美術史の研究室が移ったが、その建物の西側に書庫が設けられ、ここに各研究室の図書を併置した。第二次大戦の激化に伴い、空襲の被害を避けるため、附属図書館のみならず、史学科の図書も北区の農村等に疎開させることになり、最後の疎開が完了したのは敗戦の前日であった。敗戦後に判明したのは、美術史家のラングドン・ウォーナーらの提言により、京都と奈良の文化財を保護するため、空襲の対象から除外されていたことで、疎開の必要はなかったことになる。

第二次大戦において、京都と奈良が殆ど戦災を受けなかったのは、文化財を愛したウォーナーの提言による、と伝えられている点に関して、昨二〇一六年秋に京都文化博物館で開催された京都国際映画祭で上映され、その後、東京で上映されて評判になった金高謙二の映画『ウォーナーの謎のリスト』（京都国際映画祭2016招待作品）シネマボックス）を紹介しておこう。カタログでは、「日本を愛した男たちがいた」と題する特集を組み、ウォーナーを始め、セルゲイ・エリセエフ、ヘンリー・スティムソン、ゴードン・ブランゲ、朝河貫一らについての略伝を記している。日本において空爆すべきでない文化財が掲載された、いわ

ゆる「ウォーナーのリスト」には、北は青森の弘前城から南は沖縄の首里城にいたる一五一のなかに、京都・奈良の多くの寺社を中心に、東京などの大学図書館も含まれていた。近畿地方に限定すると、京都の大谷大学附属図書館、同志社大学図書館、京都帝国大学と東方文化学院図書館、龍谷大学図書館、奈良女子高等師範学校図書館、大阪帝国大学図書館の六大学の図書館が挙げられている。ちなみに、金高謙二監督は、戦時中の日比谷図書館に焦点を合わせた映画『疎開した四〇万冊の図書』の監督で知られる。

蔵書の疎開もさることながら、戦争の激化とともに始まった学徒の勤労働員と学徒出陣に触れないわけにはいかない。一九四三（昭和一八）年六月二五日に閣議決定された「学徒戦時動員体制確立要綱」により京都帝大では、まず九月には文学部と医専の学生・生徒約千三百名による府下における薪の運搬作業が行われた。ついで十月二日に公布された勅令第七五五号「在学徴集延期臨時特例」で文系学部の学生に対する徴集延期が停止されて、学徒出陣が開始され、十二月までにキャンパスで文系学部の学生は激減した。学徒出陣の苛酷さは、言うもさらなり。十月一二日には、「教育二関スル戦時非常措置方策」が閣議決定されて、大学に残った学生に対しても、年間四カ月の勤労働員が課されることになったのである。勤労働員の厳しい環境は、付添教官として愛知県

豊川海軍工廠に出動した学生の動向を生々しく記録した、西洋史の井上智勇による「第二次世界大戦中の学生―いわゆる豊川事件を中心に―」（『京都大学文学部五十年史』附録〈回想録〉）を参照されたい。

一九四五（昭和二〇）年八月十五日の敗戦後、GHQの指令により、戦争中に自由主義的ないし反軍的言動ゆえに休職や辞職を余儀なくされた教師の資格を回復させ、戦争に協力的な言動の責任をとって教職員不適格となった者は教職追放あるいは公職追放とし、辞職させた。文学部では前者の該当者はいなかったが、教職追放されたのは、哲学科の西谷啓治・高山岩男・松村克己と史学科の西田直二郎・鈴木成高の五名、公職追放には東洋史の矢野仁一と支那哲学史の高瀬武次郎の兩名誉教授も含まれた。このほか、人文地理学の小牧実繁教授・室賀信夫助教授・野間三郎講師の三名は、大東亜共栄圏の地政学的解釈をもって戦争を正当づけた責任をとって、追放に先立って辞職していた。教職追放によっても東洋史と考古学の両教室は無傷であったが、国史教室と人文地理学教室は大打撃を受けた。西洋史の原随園が国史教室を、東洋史の宮崎市定が地理教室の主任を兼任して、再建に努めることになったのである。

旧制の中等学校、高等学校、そして大学における歴史教育を、

国史・東洋史・西洋史の三教科で行ってきた態勢は、第二次大戦の敗北によって大きな影響を受けることになった。GHQによる占領政策の一環として、学校教育制度も大改革がなされた。明治以降つづけられてきた、小学校六年・中等学校五年・高等学校三年・大学三年が、小学校六年・中等学校三年・高等学校三年・大学四年に変えられたのに対応して、旧制中学の後半に該当する新制高校における歴史教育として、東洋史と西洋史を合体させた「世界史」という新教科が発足し、国史を改名した「日本史」と並び合うことになった。

しかし旧制高校を教養課程として統合した新制大学における歴史教育は、何故かは知らないが、従来どおり東洋史と西洋史としてそのまま存続し、国史あるいは日本史と三本立ての態勢が継続した。つまり、日清戦争・日露戦争の時期に始まった東洋史という教科は、第二次大戦の敗北を契機として、中等教育の場では世界史のなかに吸収されてしまったが、高等教育の場では現在にいたるまで相変わらず存続している。

新制高校で世界史の教科が発足したのに対応すべく、教科書の編集企画が、一九四九（昭和二四）年の年頭から始まった。宮崎市定の逝去後、書齋に「戦後の学会」と記された封筒があって、その中に世界史研究会編の『世界史』と題する五冊のパンフレッ

トが含まれていた。従来言及されることのなかった、この五冊の紹介をしておきたい。

第一冊は、全四頁からなる「予告号」であつて、一九四九年一月三〇日付の発行、編集は京大文学部陳列館内の世界史研究会、非売品、編集人は藤枝晃、発行所は世界史研究会仮事務所の平安文庫とある。第一頁には、宮崎市定による「世界史の構想」と題する文章（『宮崎市定全集』に未収録）と、囲み記事の「世界史研究会大会予告」が掲載されている。参考までに、宮崎の「世界史の構想」を再録する。

「世界史の構想」

世界史の体系とは、具体的に云へば、如何に地域区分と時代区分を立てるかにある。従来は漠然と西洋と東洋（アジア）とに分けてゐたが、文化の系統を異にする西亜と東亜とを強いて一つに纏めて東洋とし、之を西洋に対立させるのは無理である。アジアは地形によつて少くも三地域、即ち埃及、メソポタミヤを含めた西亜、中国を中心とした東亜、及び印度、南洋に跨がる南亜とに分ける必要がある。

時代区分に対する一試案。最初人類の文化は即ち分化であつた。最古の文化は西亜に発足するが、そこから欧洲と印度が分離した。遠隔の中国は特殊な文化を創造したが、絶えず

西亜から影響されてゐる。各地域は夫々の内部に於いて凡そ三時期を經過する。先ず分散状態から集中に向ひ大統一を形成する古代史的発展の時期、次に中世的な分裂、停滞の時期、最後に再び新たな大統合に向ふ近代的な時期である。西亜は最も早く、波斯王朝が史的発展の頂上であり、アラビヤ人の勃興と共に近代的な発展を踏み出してゐる。西洋は少し宛遅れ羅馬帝国が古代の極点であり、文芸復興から近世が始まる。東亜の進行は西亜より遅れ、西洋より早い。所が西洋の産業革命と資本主義とは、長い間分化して来た四つの地域を再び一つに統合する傾向を見せて来た。分化と統合の織り成す綾が世界史である。されば地域区分も時代区分も、その効用に自ら限界があることを知らねばならない。

囲み記事の大会予告は、日時は二月廿日（日）、会場は東方文化研究所、創立総会は規約審議役員選挙その他、講演は水野清一の「東亜における先史日本」、幻灯は「新しい日本の歴史」古代篇その他（大毎教育スライド試写）、懇談会ならびに委員会（別室）とある。第二頁には、「史学界共同研究の機運 研究者と教授者の直結 世界史研究会創立準備会の成果」と題する詳しい記事を載せている。すなわち一月十八日に東方文化研究所を会場に、世界史研究会創立準備会が開かれた。京大文学部史学科の各教室

と、人文科学研究所に吸収される直前の東方文化研究所はじめ、関西諸大学ならびに京阪の新制高校の社会科の有志が集まって懇談した。国史・東洋史・西洋史・地理学・考古学の諸分野を包含し、また京大・神戸経済大・立命館大・同志社大・大阪外専門学校その他関西諸大学、高校教育当事者より参加者を見たことによつて、珍しく賑やかで実り多い会合になったようだ。参加者は約四十名。高校教諭としての参加者の中に、私が日本史を習つた大阪府立八尾高校の澤井浩三の名も見える。第三頁には、「新学制にそなえて世界史編集の企画」として、十八名の執筆者による分冊の「新制世界史」を三月末には出版すること、第四頁には、「世界史研究会規約（試案）」を掲げるとともに、前回は朝日・京都・国際など各新聞社の御声援をえたが、この度はさらに毎日新聞社の後援をえて大会の内容を賑やかにしたい、という記事を、発起人代表・藤枝晃の名義で記している。

第二冊は、全八頁からなる「第一号」であつて、一九四九年二月二〇日付の発行、編集などは「予告号」と同じ。第一回大会の報告が掲載され、総会の司会は宮崎市定、座長は地理の織田武雄、経過報告したのは発起人代表の藤枝晃であつた。四分冊からなるA5判の教科書『新制世界史』の内容一覽と十八名の共同責任執筆者の氏名と肩書が発表され、B6判の教授用別冊ともども、

四月から六月にかけて発行されたことが発表されている。また委員として、企画委員が宮崎市定・井上智勇・織田武雄の三名、編集委員が外山軍治・前川貞次郎・会田雄次の三名、庶務会計委員として日比野丈夫・藤枝晃と平安文庫の前川晃一の三名、地方連絡委員として、名古屋の中山治一・広島の中堀誠二ら十七名が決まつたこと、そして新刊書評などのほか、第二回大会予告がなされ、三月廿日に大阪朝日新聞社で聞き、井上智勇と田村実造の講演がある、と伝えている。

第三冊目は「第二号」で、一九四九年五月八日付の発行。巻頭に石田英一郎の「世界史と一國史」のほか、井上と田村の講演概要や宇都宮清吉の「〈新制世界史〉第一分冊を手にして」という詳しい読後感のほか、貝塚茂樹「中国古代史学の発展」・宮崎市定「アジア史概説」・藤枝晃「征服王朝」などの短評を掲載している。第三回例会を五月十五日に東方文化研究所で行い、三品彰英と原随園の講演があることを案内している。

第四冊目は「第三号」で、一九四九年十月十五日付の発行。編集が京大人文科学研究所内の世界史研究会に代わっている。第四回例会には、「〈新制世界史執筆者と教授者と語る会〉と副題がつけられ、十月二十九日に毎日新聞社大阪本社で行い、今西錦司と宮崎市定の講演があることを案内。この講演会については、（東

方学術協会と自然史学会と共催」と注記されている。東方学術協会とは東方文化研究所の外郭団体で、講演会の開催や学術書の出版を行ってきた。

そして自然史学会は、かつての西北研究所のメンバーを中心に作られた、自然科学畑の人間も、文科の人間も語り合える学会で、会長はなく、藤枝晃・岡田芳三郎・梅棹忠夫の三名が常任委員で、学術雑誌『自然と文化』の第一号が刊行されるのは、一九五〇年五月のことである。また〈秋の学会〉として、東洋史談話学会大会・西洋史読書会・支那学会大会・史学研究会大会・国史読書会大会・考古学談話学会大会・人文地理学会大会などを案内し、〈学界雑報〉として京大史学科講義題目を、国史・東洋史・西洋史・地理の順で列挙しているが、なぜか考古学の項はない。つづいて各大学の消息をのせます、と書かれているが、四分冊の『新制世界史』が完結したからであろうか、『第四号』は発行されなかった。

第五冊目は「号外」で一九五〇年二月二十五日付の発行。これまではB5判であったのが、A5判に代わった。第一頁に「新制日本史編集の意義」なる文章を冠し、世界史研究会が「新制世界史」の姉妹篇として三部からなる「新制日本史」を発刊すること宣言している。第一部は「日本史通観」で三品彰英の責任執筆。

第二部の「日本史の基礎的諸問題」は斬新な企画で、織田武雄「日本国土の歴史」・水野清一「日本民族の起源」・浜田敦「日本語の系統」・森鹿三「古代日本の周辺」・宮崎市定「日本史と世界史との関連」といった論文が並んでいる。特に目を見張るのは、第三部「現代史の諸問題」であって、政治史・外交史・経済史・社会問題など十四項目について、原稿を五月末を締切りとして公募し、末川博を委員長とする審査委員会が審査し、採用原稿には稿料を支払うとする。第一部と第二部は発行されたが、第三部は発行所の平安文庫が倒産したため、実現には至らなかった。

出版社の倒産がつづいた混乱期の一九四九年と五〇年に刊行された、世界史研究会編の『新制世界史』と『新制日本史』は、文部省の検定を気にした気配は感じられない。ところが、それを踏襲した京都大学世界史研究会編（著作代表者・宮崎市定）の『新しい世界史』（一九五三年、数学研究社）には、「文部省検定済教科書」と明記されている。手さぐり状態で自由な発想で始まった戦後の歴史教育が、しだいに型にはまっていった状況を推測させる。

ちなみに、『新制世界史』は京都大学文学部の図書室に所蔵されていたが、同人文科学研究所の図書室に、内藤戊申の遺族から寄贈された『新制世界史』と『新制世界史 教授用別冊』が、近

年（内藤文庫第二）として収蔵された。（内藤文庫）は内藤虎次郎の旧蔵書で、第二は子息の旧蔵書ということになる。

四 『史林』第三卷の新企画

敗戦後の京都大学史学科では、教職追放により欠員となっていた教授陣の補充が静かに行われた。まず宮崎市定が兼任していた人文地理教室で織田武雄が助教授に採用され、一九五〇年十一月に教授に昇格した。東洋史では宇都宮清吉が助教授として一年三カ月在任した後に名古屋大学教授に転出し、その後任として山口経済専門学校教授の佐伯富が、一九四九年五月に着任した。そして原随園が兼任していた国史では小葉田淳が同年十一月に東京文理科大学教授から転任してきた。すなわち一九四九年末に至って、ようやく陣容が整ったのである。

学制改革により、新制高校が新設されて世界史の教科が新設されるのに対応するため、京都大学史学科の関係者が総動員された時期に、文学部長の重責を担ったのは、西洋史の原随園であり（一九四八年九月～一九五〇年九月）、その後任が宮崎市定であった。

一九四三年夏以降、敗戦の気配が濃厚になり、京都大学の構内は重苦しい雰囲気包まれていたが、史学研究会の『史林』に關

しては、敗戦の歳の一九四五年の第三〇巻まで、年間四冊刊を大事に護持した。しかし、第三一巻は翌四六年に第一号を僅かに一冊しか刊行できず、四七年に第二号と第三・第四合冊号で了え、第三二巻は四八年に一冊、四九年に一冊、二号で了えるという惨憺たる情況が続いたのである。

このような窮状が、一九五〇年になって打開されるに至った。原随園理事長のもと、編集長が井上智勇から着任したばかりの佐伯富に交替。この佐伯が、獅子奮迅の活躍をして、第三三巻の年間六冊の刊行を実現させたのである。第一号《近代史の諸問題》を始め、第二号《古代都市国家の諸問題》、第三号《地理学と考古学》、第四号《中世史の問題》という特集号を組んだ。第二号の表紙には、《古代都市国家の諸問題》の特集である、という文言は見えない。しかし、その編輯後記には、

国史、東洋史、西洋史、地理学、考古学の各分野において、夫々専門の研究雑誌が発刊せられた現今の学界の状況において『史林』の如き各学科の総合雑誌の存在すべき余地が果してありや否や。思うに、国史、東洋史、西洋史等の研究論文が、常に世界史的立場を背景に書かれていることはいうまでもないが、併し、具体的に一つの世界の歴史事象の意義を真に理解するためには、やはり、他の世界の類似の事象を捉え、

これと比較し、乃至はその事象との聯関を辿ることによつて始めてなしうる所である。かゝる意味において「史林」の如き綜合雜誌は国史、東洋史、西洋史等の如き各専門雜誌の企画しえない編輯方法も可能なわけである。即ち、ある一つの歴史事象について、夫々、各分野の歴史的視角から、同一の問題を究明することによつて、そこに始めて各世界における同一問題の聯関性と特殊性とが具体的に明らかになせられる。本号はかゝる立場から『古代の都市国家』の問題をとりあげ、各専門家の立場から、夫々問題を提起して戴いたもので、吾々の企図する編輯方針も若干充足せられたものと信ずる。

（中略）

尚、學術雜誌は單に研究論文を掲載するのみならず、学界の情勢動向をも読者に報告する義務がある。かゝる点では、従来「史林」はその義務を充分に果しえなかつたのに鑑み、今後はこの使命をも十二分に達成するために、月刊として再發足することになつた。たゞ本年は準備の都合で、その実現は困難であるから、現在は隔月刊の方針を以て計画を進めている。読者諸賢の御期待と御声援とを切望する次第である。

（佐伯富）

と書かれている。しかも、この号には次のような、史学研究会会

員と同好諸氏各位に宛てた折込が入れられている。

「史林」の新發足にあたつて

大正五年、「史林」創刊以來、こゝに三十五年、本誌は色々悪条件にも拘らず、地道な歩みを黙々として続けて來ましたが、この度従來の行き方に対して強い反省が加えられ、新しい時代の歴史的慾求に即応するため、こゝに新しい希望と決心とを以て、新發足することになりました。

従來や、もすれば本誌は専門研究者のみの「史林」に偏し、歴史学の普遍化、乃至は各研究と研究との連関性という点に、尚幾多の反省すべき余地があり、こゝに「史林」が一般の人々に親しみにくい印象を与え、且つその研究のもつ全体的なつながりが理解し難かつたものと考えます。かような自己反省の上に立つて、従來の専門的研究をより深めていくことは勿論のこと、更にこの研究をわかり易く、而も吾々の生活自体に強く結びつけようとするのが、吾々の念願とするところであります。

これがために編輯方針においても、専ら平明を旨とし、更に国史、東洋史、西洋史、地理学、考古学の各研究が、夫々相互的な連関を以て理解せられるような編輯をして見たいと思つています。

このような意図に基き、昭和二十五年一月号(第三十三卷第一号)には、近代史の諸問題、四月号(第三十三卷第二号)には古代都市国家の諸問題を夫々取り上げました。以後引き続きこの新しい方針に従つて編輯を行う予定であり、第三号は地理学考古学、第四号は中世史の問題の特輯号をお送りする筈であります。又今後は、地方会員諸氏と「史林」との学問的なつながりを深くするために、各地の支部に於いても、しばしば學術講演、討論会を開く外、地方会員諸氏の研究を「史林」に掲載しうる道を開きたいと考えています。凡そ学問の研究は、少数の学者のみの力を以てしては、到底大きな成果をあげることは出来ません。多数の人々の力を結集することによつて始めて輝しい金字塔を築きあげることが出来るものと信じます。「史林」と地方会員諸氏との学問的連繫を強めんとする意図も、実はこゝに存するわけにあります。幸い教育タイムス社は、現今出版事業の甚しい不況の中にあつて、とく吾々の意図する所を諒とせられ、多大の犠牲と厚意とを寄せられ、本年一月号より、「史林」の発行を受諾せられ年六回の定期刊行も愈々軌道に乗つて参りましたので来年よりは愈々月刊にするために諸準備を進めております。

こゝに「史林」第三十三卷第二号をお手許にお届けするに

当り会員諸氏の今後の御協力を重ねてお願いすると共に未入会同好諸氏の御入会をお勧めする次第であります。

昭和二十五年四月

史学研究会

この文章も佐伯の手になつたものと考えて、大過あるまい。私が学生時代以来うけてきた印象では、温厚な守旧的な人柄だと感じていたが、これら編集後記と折込には、革新的な抱負が漲っている。しかし結果的には、来年よりは月刊にしたいという思いは空回りし、第三六卷までは年間四冊に止まり、第三七卷の一九五四年から年間六冊が実現し、今に続いているのである。

おわりに

すでに述べたように、史学研究会は京大文学部の哲史文の三学科の内、史学科の各教室を中心に運営されてきた。しかし、一九九二(平成四)年四月に第四学科として文化行動学科が新設され、哲学科から五講座、史学科から地理学と地域環境学の二講座が移行したほか、新たに二講座が増設された。ついで更なる飛躍を期して、学部改組の大規模な再編が計画され、九五年には一学科六系十六講座からなる新組織へと移行した。その結果、現代文化学系が新設され、史学科から現代史学講座が移行したのである。

しかし、地理学も現代史学も史学研究会から脱会することなく、今に続いている。さらに翌年には大学院の組織も編成替えがあり、大学院重点化が実現した。それに何といっても喜ぶべきことは、従来の地理学・考古学だけでなく、日本史学・東洋史学・西洋史学の三教室が全て実験講座になって、予算規模が三倍強に増え、書籍の購入も楽になったことである。

『史林』の投稿者と新制大学になって以降の京大東洋史学研究室との関係に触れておこう。私は次に述べるように、卒業論文を〈研究ノート〉として掲載していただいたが、これは全くの例外であって、一般的には修士論文を手直ししたものを先ず『東洋史研究』に寄稿し、第二番目の論文を『史林』に投稿することになっている。ほかの研究室の場合に修士論文を手直ししたものを先ず『史林』に投稿するらしいのとは、異なることに注意を喚起しておきたい。

最後に『史林』と私との関係に触れて稿を終えたい。卒業論文を「三司使の成立について―唐宋の変革と使職―」第四四卷第四号に掲載した（一九六一年）のち、論文を寄稿したのは第五七卷第五号（一九七四年）に掲載の「唐代の県尉」だけである。これは自信作で『日本学者研究中国史論著選訳第四卷 六朝隋唐』（中華書局、一九九二年）に「唐代的県尉」と題して華訳された。停年退官を五カ月後にした、二〇〇〇年十一月二日に京大大会館で開催された平成十二年度史学研究会大会において、「山陽と湖南」の演題で頼山陽と内藤湖南について講演し、要旨が第八四卷第一号（二〇〇一年）に掲載された。今回の二〇一六年十一月二日に京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールで行なわれたシンポジウムの後半にあたる、パネル討論の記録が、第一〇〇巻第一号に掲載された。本稿ともども是非参看されることをお願いしたい。

（京都大学名誉教授）